
嘘それは泥棒の始まり

鈴木成海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘それは泥棒の始まり

【Zコード】

N74140

【作者名】

鈴木成海

【あらすじ】

僕が初めて書く第一作目の小説です。まあ気軽にみてください

僕は小さじ一歩からおばちゃんに「嘘は泥棒の始まりだから嘘はつくんじゃないぞ」と言わってきた。だけど僕はある時、学校で友達と話しているときに、こう呟いた「俺つてさあ年玉10万もらつてんだけ!」などといふ見え透いた嘘をついた。だが友達は「お前すげえな! そんなもんうりへんのかよ」と信じ込んでしまったのである。そしてそれは友達から友達へといろいろな人にわたつていってしまったのである。そして僕は嘘をついたらみんなが信じ込むと錯覚してしまったのである。そして何年か経ちみんなはもう高校生になつた、小学生からの友達などほとんどいるはずもなく、それに僕の言った嘘を知るものもいるはずはないだろうと思いつつ少し安心していた。だが僕はその時まだ、これから起る恐怖を知るはずもなかつた・・・。

第一章 嘘とこの先のハスゲーム

今日俺は高校の入学式を迎えた。

俺は昨日からドキドキしたままで正直緊張していた。
なぜなら俺は一年の代表として前に出てしゃべるのだから
そしてとうとうしゃべる時が来た。

「一年代表、進藤歩（しんどうあゆむ）」

「はい！」俺はそのまま舞台へあがつた。

俺はそのまま黙々と読み、俺は一礼をして席へもどつた。

「はあ緊張した～」とつい声がもれた。

それを聞いていた隣のやつがクスッと笑つた。

「なんだよ

「ああ「めん」「めん」

「君代表で出るくらいだから頭いいんだよね？」

「いやまたまだよ

俺は少し照れた

「じゃあ俺とあとでゲームしようぜ」「

と彼はいきなりそんなことをいつのだ。

『こいつこきなり何いってんだ！？』俺はそんな風に思つた
「いいぜやってやろじゃねえの」だが俺はOKをした。

「じゃあ終わつたら校舎裏に来て

「わかった」

その後入学式が終わるのを黙々と待ち続けた・・・・・・

入学式が終わるとすぐ校舎裏に行つた。
すると人が50名くらいいるのだった。

俺はそれに驚いた、ゲームと云うのは小物のことだと思つたからだ。

そこにはいつの姿がないからだ。

だが見渡すとみんな頭が良さそうなやつだけだ。

そしてしばらく時間がたつと

あいつが現れた。

「どうもみなさんお待たせしました」

周りがざわついた。

「おい！お前いつまで待たせてれば気が済むんだ」
大柄の男がそう言って、あいつのえりを掴み言つた。
するといきなりあいつはその男を投げ飛ばしたのだ。
それを見てまわりは静まり返つた。

「まったくガサツな男だ」そんなことを言つて
いきなりルールを説明し始めた。

「それではルールを説明しますよ、このゲームは
いわゆるデスゲームです。」

周りはまたざわついた。

一人の女性がいきなりこんなことを言つた。
「私やめる！こんなことをしても意味ないわ」
そしてこの女性が教室に戻ろうとする
あいつはボソッとこんなことを言つた。
「戻らないほうがいいよ、死ぬから」

俺は思わず

「やめろ行くな！！」

その時にはもう遅かつた

その女性はいきなり倒れこんだ。

彼女の近くによるともう死んでいた。

「あ～あ、だから言つたのに」

「お前なんでこんなことをするんだ！！」

俺は激昂した。

「まあまあ落ち着いて今から君たちには違つ学校でゲームをするんだから。」

「はあ！？違う学校？」

俺は疑問に思った

「まあ行けば分かりますよ」

あいつはそういうと俺たちを一人ひとり氣を失わせていった。

「何してんだ！」

「まあ起きた時には分かりますよ

あいつは微笑んだ

そして俺も氣を失った。

だが俺は氣を失いかけている中あいつがこんなことをしゃべつていふことがわかつた。

「50名様ご招待いや49名か、ハハハハハ

第2章 第一ステージ 序章（前書き）

いや～やつぱり参考にあるものとかないと書くのは難しいんですね
＾＾；やつぱプロは違うなあとか思っちゃいますよ～まあこんな中
学生が書いたので良ければぜひ読んでください。

b y 鈴木成海

第2章 第一ステージ 序章

俺は目覚ましの音で目が覚めた

いつもと変わらぬ俺の部屋

だが何かが違うそんな気がした

下に降りて親を読んでも返事をしない

何かおかしいまさかもうゲームは始まっているのか？

そんなことを思い外に出るとポストに手紙が一通入っていた

「俺宛てだ・・・」

開けてみるとあいつからの手紙だった。

読んでみると詳しくルールが書いてあった

デスゲームルール説明

・このゲーム内で嘘をついてはいけない
もし嘘をついた者がいればその者は死をもって罰を与えられる

・このゲームは親などはいなく学校に関係があるものしか存在しない
だが意思をもつて動くものは参加者49名しかいない
だが食事などについてはコンビニから盗んで食べるもいいし何を食べようが

自由でサバイバル感覚でいると良い

・このゲームはステージ制で第一ステージで30名になれば第一ステージへ

15名になれば第三ステージへとだんだん人は減っていき
ファイナルステージまでには2名にまで絞るつもりだ

・腕についてる時計は人の人数をはかるものだ今は49になつていいだろう

それで人の人数がわかる

あともう第一ステージは始まつてていると思つた方がいいあるう

諸君ら頑張つてくれたまえ

b yデスイーター

タ

俺は唖然とした。

「デスイーターとは誰なんだ」

下の方にPSという文字がありそこにはこう書いてあつた

PS

このゲームは学校に遅刻をして死で罰せられる

「なんだつて！！」

俺は焦つた

もう遅刻寸前の時間だからだ。

「やばい！！」

俺はもう死ぬのかそんなことを思い急いで学校へ行つた

俺はギリギリ間に合つた

だが時計を見ると47という数字になつていた。

「2人減つてゐる・・・」

教室から外を見ると、

あいつのえりを掴んだ大柄の男と赤髪の学校でも有名なヤンキーが
黒い影に飲み込まれている。

とてもエグイ飲み込み方をしている。

俺は見るに堪えなくなつた、

そして外をみるともうその影は消えていた。

それをもう一人の参加者が見ていた。

そいつの名は一階堂綾香（にかいどうあやか）
超金持ちのお嬢様だ。

俺はこのあとこの一階堂が力ギを握る人物とは思つてもいなかつた。
・・・

第2章 第一ステージ 序章（後書き）

いや～自分で書いていてもこの「トスゲーム」には
参加したくありません（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7414o/>

嘘それは泥棒の始まり

2010年11月8日08時33分発行